

昭和二十年七月四日、四キロの道程を母子は乳母車を押し、よろけるように歩いて屋島に辿り着いたのです。母の姉の所に行ったのです。

「お父さん来てますか？」

「いいやまだ着いてないよ」

母は父の安否を気遣い、三歳の弟を置いて未だ燃えさかっている高松へ再び四キロの道を引き返したのです。

玄米飯の炊きだし飯を食べて、ゆっくりとする間もなく、夜には、また空襲に会うので叔母共々、川の堤防で野宿です。蚊と暑さで寝ることも出来ず、父母の事が心配で妹弟達が泣くのをなだめつつ待ち続けました。

夜半に母が帰ってきました、一人だけで帰って来ました。私達の顔を見るなり「お父さんがこんなになっ

たよ」と小さな包みを手渡すのです。

半紙に包んだ骨をガーゼにくるんでいるのです。「お父さんがこんなに小さくなった。こんなに小さくなった」

半紙の中で骨がカサカサと小さな音をたてました。

私は父の死顔を見ていません。ただ小さな包紙で父の死を知らされたのです。

小さくなった、あの包みの感触は今でも忘れる事が出来ません。

母の話では、高松の中心にあるロータリーの貯水槽の中で死んでいたそうです。焼夷弾の直撃をうけて。

未だ焼けくすぶっている火の中で父を捜し求めて、未だ焼けくすぶっている火の中で真っ黒に焼けただけ死体を見つけてロータリーに着いたそうです。

父の死んでいた場所は一番死者が多く、トラックに収容して火葬場に移送したそうですが、母はその死体の中に一緒に入って、父と共に火葬場に行ったそうです。火葬場では、あまりに多い死体の為、一体づつ焼却出来ず、一カ所にまとめて重油をかけて焼いたそうです。母はお金を包んで、焼けたトタン板の上で、父一人を焼いてもらったと言っていました。

一夜で家を焼かれ、父をなくし、四人の子どもを抱えた母の、その後の苦しみは大変でした。食糧もなく、疎開していたわずかな衣類が次々とお米と物々交換で消えていきました。

今日八月十五日、正午に戦没慰霊者に黙祷。罹災当時の、あの暑さの中での悲惨な姿を思い起こします。